

遠藤周作とPaul Endo —母なるものへの旅

没後10年を経てなお多くの人に愛され続ける遠藤周作の文学の秘密とは——。

カトリック作家として、“日本人にとってのキリスト教”というテーマを生涯を通じて問い続けた遠藤周作(1923-1996)は、1955年に「白人」により第33回芥川賞を受賞、1957年に発表した「海と毒薬」で作家としての地歩を固めました。1963年から約25年間を町田市玉川学園で過ごし、この間に『わたしが・棄てた・女』、『沈黙』、『死海のほとり』、『侍』などの遠藤文学を代表する作品を多く執筆し問題作を提示する一方、“狐狸庵もの”“ぐうたらシリーズ”と呼ばれる一連のユーモア溢れるエッセイにより、多くの読者に親しまれました。そして、これらの作品の底流には、人間の弱さに対する慈愛に満ちた母のような温かなまなざしがあり、それが孤独な現代人の心の渇きを癒す普遍的なメッセージとして、広く共感を得ることとなりました。

また狐狸庵先生という名で親しまれた遠藤には、もう一つの名、Paul (ポール) という洗礼名がありました。本展では、小説家として出発する以前の遠藤に焦点を当て、母の願いによりPaulという名を与えられた少年時代の洗礼体験を原点として、この母の想いである“信仰”を背負い母への愛着と反抗の中で過ごした青年時代、そしてPaul Endoと呼ばれた2年9ヶ月に及ぶフランス留学体験、さらに帰国直後の母の突然の死、そうした体験の礎の上にどのように遠藤文学が築かれていったのかをあらためて見つめ直し、母なるものを求め続けた集大成といえる『深い河』へと至る人生の旅の軌跡を辿ります。

展示資料としては、ページの端々に書き込みの多く残るフランス語文献、留学先から書き送ったエッセイの草稿、遠藤の才能を早くから見出し励まし続けた母・郁からの書簡などの留学に関する資料のほか、新たに発見された大連時代の文集、『深い河』の草稿や小説執筆のための創作ノートなど、初公開のものを含む約300点を出品します。

遠藤周作の生涯と作品を通して、遠藤が人生の旅の中で求め続けた“母なるもの”をそれぞれの心に描いていただければ幸いです。



1968年頃、町田市玉川学園の自宅にて

写真：毎日新聞社提供

関連催事

◆ 関連イベント1 ◆

遠藤順子氏講演会「玉川学園時代の遠藤周作」

2007年10月7日(日)14:00~15:30

[会場]町田市民文学館/2階大会議室

[定員]100名

◆ 関連イベント2 ◆

連続講座「遠藤周作を読み解く」(全5回)

①10月13日(土) 加藤宗哉氏「遠藤周作から教えられたこと」

②11月 4日(日) 山根道公氏「遠藤周作の求めた母なるもの」

③11月10日(土) 高山鉄男氏「フランスの遠藤周作」

④11月17日(土) 今井真理氏「遠藤文学と心の旅」

⑤12月 1日(土) 金田浩一呂氏「町田会の思い出」

[時間]各回14:00~15:30

[会場]町田市民文学館/2階大会議室

[定員]100名

[イベント1・2の申込み方法]

往復はがきに ①希望イベント ②住所 ③氏名 ④電話番号 ⑤年齢を明記の上、9月20日(木)必着で「町田市民文学館・遠藤展担当」へ

*イベント別1人1枚

*応募者多数の場合は抽選

*いずれも受講料は無料

◆ 関連イベント3 ◆

文学サロントーク

①10月16日(火) 二田原英二氏(彫刻家)

②11月20日(火) 稲井勲氏(写真家)

[時間]各回17:30~19:00

[会場]町田市民文学館/1階文学サロン

[定員]各回20名(先着)

[費用]茶菓子代500円

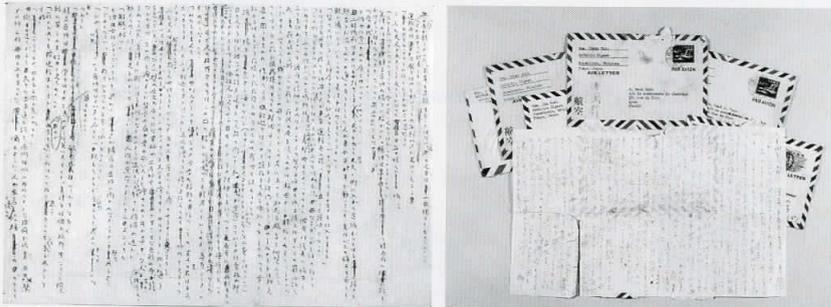
[申込み方法]電話・受付カウンターにて9月1日(土)より受け

■ 展示解説

日時：10月9日(火)、11月13日(火)、12月11日(火)

各回14:00~14:30、申込み不要(展示室にお集まりください)

*いずれも詳細は町田市民文学館・遠藤展担当までお問い合わせ下さい。



原稿用紙の裏側に鉛筆で細かく書き込まれた『深い河』の草稿

留学先に届けられた母・郁からの書簡の数々

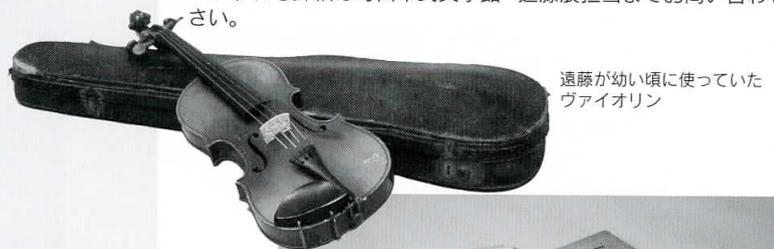
交通案内



- JR横浜線「町田駅」町田ターミナル口より徒歩8分
- 小田急線「町田駅」東口より徒歩12分

町田市民文学館

〒194-0013 東京都町田市原町田4-16-17
TEL.042-739-3420/FAX.042-739-3421



遠藤が幼い頃に使っていたヴァイオリン

留学先で読んだF・モーリヤックの原書

